

埋蔵文化財 愛知

No. 27



西尾市室遺跡全景

溝によって区画された屋敷地が検出され、掘立柱建物、井戸、土坑などが明らかになったと同時に、200点以上の貿易陶磁片が出土し注目される。

(4ページに関連記事掲載)

シリーズ 江戸時代を掘る 3

武士のくらし——『西村次右衛門日記』より——

近年急速に調査事例が増加している、近世を中心とする遺跡に対する理解の方法としては、考古学、自然科学、そして文献史学の各分野からの分析が加えられることが一般的になりつつある。特に文献史学の分野では江戸時代に関しての多くの古文書、絵図等の文献史料の存在が知られており、詳細な研究が可能な条件が古代・中世に比して残されていることが多い。昨年10・11月に当センターが豊橋警察署の建て替え工事に伴い発掘調査を実施した吉田城遺跡も城郭絵図、吉田藩関係史料等が残されており、文献史学からの分析が可能な遺跡の一つといえる。

◇

昨年度の調査区は、幕末に作成されたとされる「吉田藩土屋敷図」に拠れば、寛延二年(1749)に吉田藩に入封した大河内松平氏の家老職を勤めていた西村孫次右衛門と東隣の西村円治の屋敷地にあたる。検出された遺構は、溝12条、井戸2基、土坑400基であり、600㎡の調査区ほぼ全面に遺構が展開していた。これらの遺構の大部分は西村氏の手によるものであり、日常生活に於ける何らかの必要性から掘削されたものに他ならない。幸いにもこの調査区の居住者であった西村家当主の一人である次右衛門為周という人物の日記が現存している。そこでその日記から世間の動向、当時の武士の暮らし振りを読み取り、吉田城遺跡を考古学以外の側面から考えてみたい。

◇

今回扱う『西村次右衛門日記』は吉田藩家老職にあった西村次右衛門為周が記した公私日記であり、その記載期間は為周が吉田藩用人となる弘化二年(1845)頃から家老職を退く明治三年(1870)頃までの記録である。為周を輩出した西村家は吉田藩士の中でも深井家・和田家とともに高級藩士で、代々次右衛門あるいは孫次右衛門を名乗り、家老職を勤めた家柄であった。また吉田藩の城下町は東海道の宿の一つであり、

併せて新居関(今切関ともいう)を管轄していることから、交通の要所であるが故に見聞に及ぶことが可能であったと思われる内容が多く書き留められている。

◇

この日記の時代はまさに徳川幕府の崩壊期にあたり、桜田門外の変、皇女和宮の下向、坂下門外の変、生麦事件等々の歴史的イベントが頻発する。これらの事件に対し次右衛門は、個人的感想こそ記してはいないものの、いずれの事件に関しても詳細に経緯や内容を書き残している。例えば、万延元年(1860)3月3日に起きた桜田門外の変に関しては、事件7日後の3月10日に地方役所(場所不明)へ出向いた際に、江戸より帰参した中間から事件の内容を知らされている。「昨今右一件故か諸家様早飛脚多く通ル」と推測しながらも、未確認情報である為「此外種々雑説有之候へ共不取留置候事故不記」と要らぬ噂が立たぬように配慮している事が窺える(2日後の3月12日に江戸よりの正式な書付が到着、事実確認が行われる)。この時の彦根藩の狼狽振りは「彦根公一件二付御在所御人数毎日夥敷下ル、御家老も下り候由実二夥敷事也」(万延元・3・15)によく示されている。また文久二年(1862)1月15日に起きた坂下門外の変についても、その12日後に「風聞専ら也、虚実不知」と家老為周の元に伝えられている。

◇

この様な時代の趨勢の中で吉田藩家老としての為周の日常政務は多方面にわたり、藩主、藩士の動向を中心とした任免・出生・忌服・縁組・離縁・修行・改名・跡式等の願書、伺書の整理がその主なものであった。登城時刻は所謂出張や儀式のある日以外は四時(午前10時)が例刻とされている。政務は、二之丸表御殿の内の「御拝所」と呼称される場所で行われていたと思われる。登城に際しての服装は、例えば「平服四時御拝所へ罷出」のように通常は平服(肩

衣と切袴の組み合わせで、無地の紋付を用いる半上下)であるが、武家社会の慣例化した年間行事の行われる式日には「熨斗目麻半着」(安政4・正・1)とされる様に「熨斗目」と呼ばれる上下が無地で腰の部分に地白の織縞のある小袖の着用が専らであった。

◇

為周は一年の内177日が休日として記されている。これを月当たりで示してみると、3・5・6・8・9・10・13・14・20・21・23・24・26・29日がほぼ吉田在在期間の休日とされている。先に述べた朝10時の出勤、月14日の休日、現在の我々の生活のリズムとは異なったゆったりとした時間のなかで日々の生活を過ごしていたことが窺える。休日を過ごす屋敷の中の建物配置についての具体的な様子は明らかにし得ないが、敷地は2159坪、三之丸側には塀(恐らく板塀)、西村円治との屋敷境の一部は植え込みであり、母屋の他に長屋、物置、厩があり、長屋の前に井戸があったことが記されている。さらに大坂在坂時には、江戸からの引き上げ家臣の屋敷地捻出のため、自らの敷地も含め藩士屋敷の整理分割を行っている。

この休日に為周は役所からの書類に目を通していることもあるが、その大半は個人の自由時間として扱われている。特に文久二年(1862)藩主に付従っての大坂登坂の前は、「今朝5牟呂沖へ鱸残魚釣ニ参ル、夜ニ入り帰宅、余程釣申候」(万延2・9・5)の様に出掛けることがしばしばであった。しかしこの日の様に大漁の日ばかりとは限らず、「不獺也」(万延2・9・24)と書かれている事も多くみられる。また東(江戸?)から来た虎の見せ物を見るために和田・深井の両家老と共に北原忠兵衛宅へ出向いており、「少々芸も致候、真物也」と感心しており、帰りに褒美を渡している(文久2・閏8・9)。また西村家秘伝の打身薬の調査方法を同姓の孫次郎に教え、「両家之外ハ決して他へ出ス事禁止之」するところは武家社会の一端をよく表している(万延2・7・24)。

◇

以上のような生活に加えて、節句・祝事の贈答、同僚藩士への振舞等々、為周の生活は常にかんりの出費を強いられていた様子が窺える。この武家社会における儀礼的生活による浪費とも受けとめられる消費が、発掘調査時の陶磁器類を中心とする膨大な量の遺物の出土の原因の一つとする事が出来るかもしれない。この事は幕政及び藩政改革において、常に儉約が唱えられる点からも上記の様な生活が行われていたことを裏付けることができるのではなからうか。

この様な奢侈的生活が表であるとすれば、裏には慢性化の傾向をしめす武家社会における経済的困窮が潜んでいる。この為周の日記の中にもその事を示す記載が多く見受けられ、例えば万延二年(1861)8月22日には「穀類并諸色高値ニ而小給之者共別而難渋被思召、依之御手当金被下之義申達候」とあり、物価高騰による下級武士の経済的困窮が問題にされている。同様にこの年の暮れには、御者頭組九組・町同心郷同心・御普請組・小足軽平坊主より吉田藩への「内借」と称される金銭貸借の願いが出されている。

◇

この武家財政の困窮は幕末に限定され得るものではなく、商品経済の発展がみられる近世初期の段階から既に始まっていると考えられている。今回分析対象とした『西村次右衛門日記』は、記録期間が幕末、それも最も混乱を究めた時期である事、地域的にも吉田藩と言う一小藩に限定されている為、一概に普遍化する事には多少の危惧を感じはするが、幕藩体制下に於ける武士階層の生活は儀礼的奢侈的側面と経済的困窮の二面性を有していると思われる。そしてこの二面性のあり方も階層内に占める位置によっても当然異なっている。近世遺跡の発掘調査によって出土する膨大な量の遺物が儀礼的奢侈的側面を具現化しているとするれば、経済的困窮は何によって把握することができるのか。生活のあり方の違いは如何にして示されるのか。吉田城遺跡理解の為の一視点である。(川井啓介)

『西村次右衛門日記』

(豊橋市史料叢書二 豊橋市 1985)

遺跡紹介

むろ
室 遺 跡

西尾市

室遺跡は、西尾市の東部、駒場町と室町にまたがって所在し、西に流れる広田川によって堆積した自然堤防上（標高5.5m）に立地している。調査は、国道23号線バイパス（名豊バイパス）の建設にともない、建設省名四国道工事事務所の委託を受け、(財)愛知県埋蔵文化財センターが、平成3年4月10日から12月末にかけて、8,800㎡を発掘している。発掘区はほぼ東西にわたり、幅40m、長さ220mである。

本稿を記している現在（12月初）、いまだ発掘継続中であるが、12世紀から15世紀にかけての集落と江戸時代末期の水田跡が明らかになりつつある。ここでは、中世集落の概略を示しておきたい。

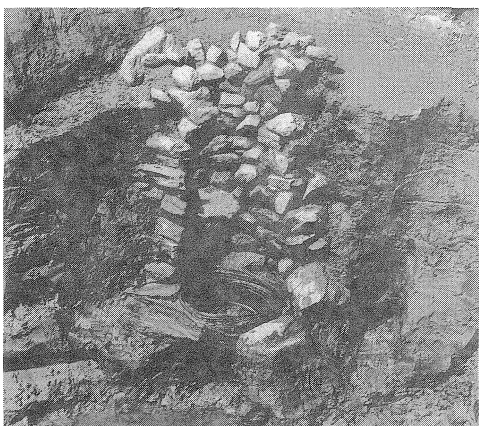
中世の集落の構造として確認されているものは、数条の溝によって区画される5ヶ所の屋敷地である。うち2ヶ所は一部が明らかになっているだけであるが、他の3ヶ所はほぼ全容を掴むことができた。東の屋敷地は、12世紀末の遺物を出土する幅8m、深さ1.5mの大溝を東に有し、3本の溝を巡らせている。一番内側の区画は東西25m、南北20mの規模をもつ不整形を呈し、内部には一間×三間の掘立柱建物2棟、土間状遺構と方形の竪穴を有する建物、石組の

井戸、土坑群が認められた。中央の屋敷地は、東西55m（南北は不明）を計り、その規模といい、膨大な数の柱穴といい、出土遺物の量も多く、石組の井戸と素堀の井戸を有し、集落内でも主体となる屋敷地と考えられる。それに対し西の屋敷地は、25mの正方形を呈する2条の溝に区画されるが、小規模であり、内部には井戸を持たない。遺物もわずかである。

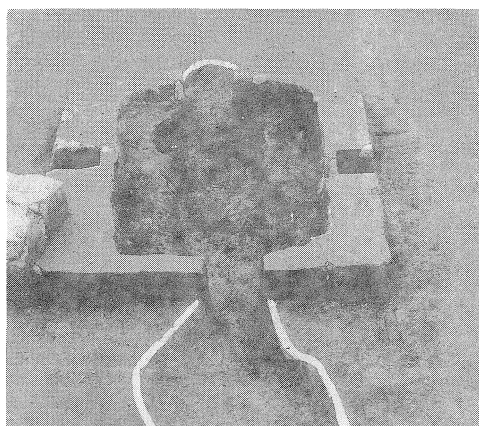
以上の中世の集落が廃絶した後、発掘区全域に火葬施設が、多くても3基ほどのブロックにまとまって点在する。時期は、土器が出土しないため明らかでないが、中世末期から近世初めのものと考えられる。検出総数は22を数え、0.8m×1.2m、深さ30cmの方形の燃烧部と長軸に添った通風溝を有する構造が明らかになった。内から炭化物、灰に混じって骨片と歯根が検出されている。

さて出土遺物として、量的には灰釉系陶器が圧倒的に多く、ついで瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の焼き締め陶器が見られる。注目すべきものとして、200点以上の貿易陶磁片がある。そのほとんどが龍泉窯の青磁碗であるが、中には新安沖沈船出土と同一の白磁小盤のような優品が含まれる。

以上のことから、室遺跡は中世の集落の構造とその性格を解明するうえで極めて良好な遺跡であると考えられることができる。（都築暢也）



石組井戸



火葬施設

山中遺跡

一宮市

本遺跡の調査は過去すでに4回実施され、今回は県立尾張看護専門学校の増築に伴い1300㎡を平成3年9月・10月の2ヶ月にわたり発掘調査を行った。

第5次となる今調査は、遺跡の北端と想定される地区に調査区を設けたものであるが、当初の予想に反して、①弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓3基（うち1基は前方後方形周溝墓）、②古墳時代後期の円墳1基、③古代の溝、④中世の村落北西端が検出された。これらのうち①に関して詳しく紹介しよう。

确实弥生時代後期と考えられる方形周溝墓は1基（SZ01）で、他2基（SZ02、SZ03）は微妙な時期にある。

SZ01は南溝が調査区外となるため全容は不明だが、東西方向で12mを測る。西溝が深いのに対し北溝・東溝は浅い。供献土器の出土はなく時期の決め手は不充分だが、恐らく山中期であろう。主体部は不明であった。

SZ02は南1/3ほどの検出にとどまった。溝底には起伏があり、周溝もゆるくカーブを描いてめぐる。これも時期決定資料は不充分だが、山中期から欠山期であろう。

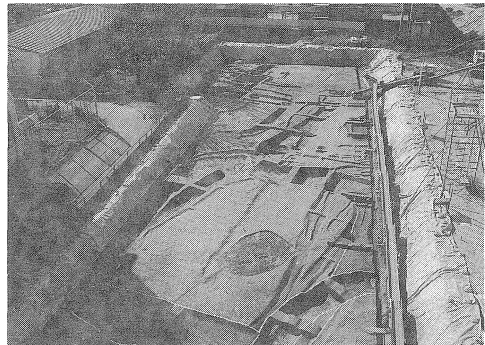
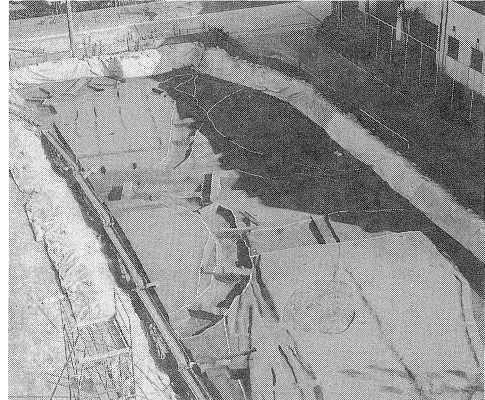
前方後方形周溝墓であるSZ03は西溝と北溝、そして前方部側の周溝の一部が調査区外となるが、主墳長推定12m、同幅9m、張り出し部（前方部）長4m以上、同くびれ部幅2mを測る。

周溝は深さ平均30cmと浅く、かなり削平されていることが推測され、主体部も検出されなかった。

周溝からの出土遺物は他に比して多く、南溝の2ヶ所からそれぞれ中形壺1、小形壺3が出土した。前者は口縁部をやや下にして押しつぶされた状態で、後者は乱雑に重なって出土した。中形壺は高さ約38cm、やや内彎して直立する口縁部をもち、頸部には突帯をめぐらす。肩部にはカゴ目（斜格子）状の暗紋が施されていた。小形壺は復元できたもの1点だが、同形なので供献用に製作されたものだろう。底部焼成後穿

孔である。中形壺は欠山期と思われるが、後者は検討を要する。

今回の調査では方形周溝墓を中心とした墓域がさらに展開していること、前方後方形周溝墓の起源を考える上で、重要な遺跡であることが印象づけられることとなった。（石黒立人）



上 調査区東部 中 調査区西部 下 SZ03供献土器

市町村日より

でんやま古墳

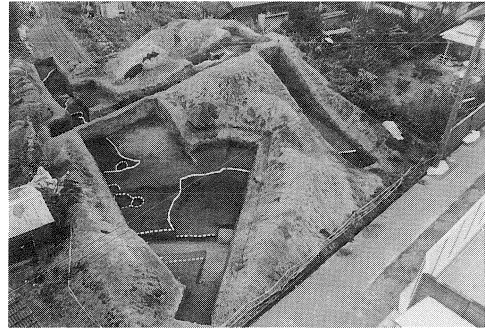
一宮市教育委員会

でんやま古墳は、今伊勢町宮後、市立今伊勢病院に南接する位置にあり、標高7.5m前後の日光川右岸自然堤防上に立地する。昭和36年5月に墳頂部のみの発掘が行われたが、管玉1個が出土したのみで、他の古墳との関連から、5世紀前半代の築造と推定されていた。

今時調査は、宅地造成の事前調査として実施したもので、墳形、墳頂部主体部、周濠などを確認するため、幅2mのトレンチを設定し発掘調査を行った。調査面積は約220㎡。

調査の結果、直径30m、周溝幅3.5m、墳丘径23m、高さ4m+αの円墳であることが判明した。また、周溝部は、北東部で切れており、ブリッジ状の構築物で外側とつながるものである。

主体部は検出できなかったが、従来墳丘の中央と考えられていた地点より、約2m東の墳丘表土を中心にコンテナ4箱分の石材（偏平な山石）が検出されており、割石を小口積みにした



縦穴式石室であった蓋然性がかなり高い。

版築構造を確認するため墳丘を断ち割ったところ、古墳構築前に黒褐色のシルト性の高い砂で基盤を造成、その後墳丘封土を交互に積み上げるという構築過程を明確にとらえることができた。また、墳丘封土の暗褐色シルト質砂層からは、弥生土器、古式土師器の小片が出土している。

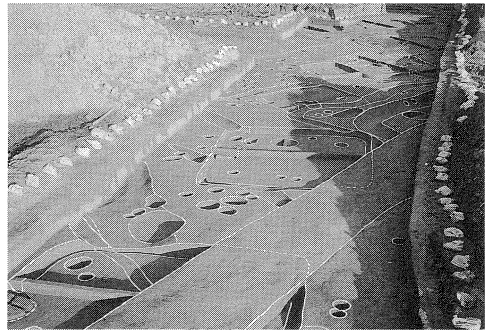
従来、今伊勢古墳群は、車塚古墳、野見神社古墳、でんやま古墳という編年がなされてきたが、でんやま古墳の主体部が縦穴式石室であるとするならば、5世紀前半という年代、及び編年に課題を提起したといえよう。（土本典生）

ハッ面山北部遺跡

西尾市教育委員会

本遺跡は分離丘陵ハッ面山の北に位置し、西尾市ハッ面町、中原町にかけて所在する洪積台地上の集落跡である。矢作川と矢作古川の分岐点のこの地域は複雑な地形を呈し、志貴野遺跡、志貴野庵寺、志籠谷井石などの古代集落や寺院が点在していて集落群をなしている。

調査は西尾市北部地区ほ場整備に伴うもので、昨年度に続き2ヵ年目で、総面積10,000㎡で実施した。発掘調査で明らかにできた遺構は出土遺物によって、Ⅰ期：7～8世紀の古墳～奈良時代、Ⅱ期：13～15世紀の鎌倉・室町時代、Ⅲ期：16世紀の戦国時代に区分することができる。Ⅰ期は開析谷に面して集落が展開され、5～6mの隅丸方形で北辺にカマドを持つ縦穴住居と2×2、1×2間の掘立柱建物で形成される。Ⅱ期は掘立柱建物群が台地最高位付近に検出され、溝で区画された屋敷地に集中する建物もみ



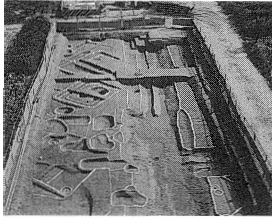
られる。Ⅲ期は南北に突出部を持つ隅丸長方形の土坑で、壁面が熱を受け、埋土最下層に人骨片が認められる火葬施設が3～5基ずつまとまって点在する。遺物は少量であるが、縦穴住居・廃棄土坑より一括して出土する例もみられる。

調査を比較的広範囲で行ったため、台地に営まれる集落の姿が想定でき、好資料が提供できるものと思われる。7世紀中葉から8世紀後葉の集落の状況、中世集落の屋敷地、非日常的な埋葬などの問題点の解明を検討課題として現在調査をすすめている。（松井直樹）

発掘調査ニュース

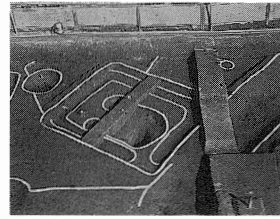
堀之内花ノ木遺跡

稲沢市



Ea区全景

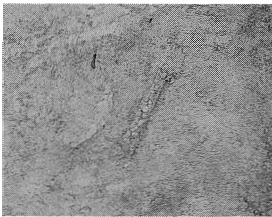
堀之内花ノ木遺跡は、稲沢市堀之内町に所在する。東西約450mに延びる細長い調査区のうち、3分の2まで調査が終了し、東端部の調査に入った。すでに調査が終了したE区からは中世の溝を中心に、弥生の住居跡3棟や古代の住居跡7棟などを検出した。



古代の住居跡

清洲城下町遺跡

清洲町



C区骨片出土状況

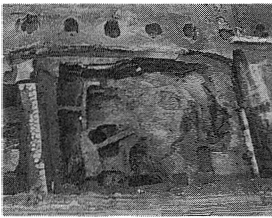
C区は清須城本丸跡から約1.5km南に位置する。17世紀初頭の溝2条・井戸・廃棄土坑を検出し、城下町期末期の商職人の屋敷地を確認した。この南では、14世紀の溝に堆積した粘土上に足跡と骨片を検出。円礫と骨片が出土する土坑も見られ、墓城が想定される。



C区SK11(井戸)

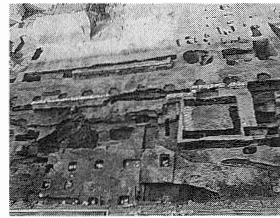
名古屋城三の丸遺跡

名古屋市



調査区西半

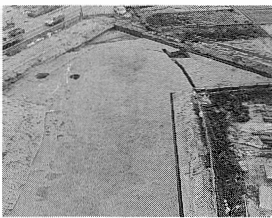
今回の調査区は県警察本部内にある。竹腰氏をはじめ3軒の武家屋敷地を検出し、屋敷間の境界溝・建物跡・廃棄土坑・井戸等を確認した。遺物は、瓦や陶磁器を中心にコンテナ900箱以上に及ぶ。また、戦国期の堀群を確認し、那古野城との関連性が注目される。



調査区東半

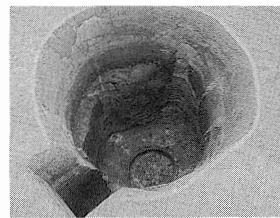
松河戸遺跡

春日井市



調査区全景

91A b区は91A a区の西に隣接する。調査区北半が12~13世紀の屋敷地であり、井戸1基、土坑1基、ピット多数を検出した。その他、14世紀の溝1条、そして調査区南端では最下層が7世紀、最上層が11世紀と時期幅のある溝1条(S D01)を検出した。



井戸内曲物出土状況

坂口遺跡

旭町



調査区(東)

坂口遺跡は、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在。調査区は、矢作川左岸、標高約114mの河岸段丘上に立地し、調査以前は畑地である。遺構は明瞭に検出し得なかったが、黒褐色極細粒砂の包含層からは、縄文中~晩期と思われる土器、石器が多数出土している。



調査区(西)

資料紹介

堀之内花ノ木遺跡出土
猿形陶製品

堀之内花ノ木遺跡は愛知県稲沢市堀之内町に所在し、木曾川の分流三宅川が形成した自然堤防の左岸に位置し、尾張国分寺跡の南に隣接する。これまでの調査結果については先月号（No. 26）でも紹介したが、尾張国分寺の寺域を区画する東西、南北の大溝をはじめとして弥生時代後期から中世にいたる多くの遺構を検出し、瓦や灰釉陶器を中心に出土遺物も非常に多い。今回紹介するのは本遺跡の出土遺物のなかでも特に異彩を放つ猿形陶製品である。

この遺物は現状では高さ5.5cm、幅2.7cmを測る。両手が欠損しており、底部は本体から離脱した痕跡を残している。胎土は精緻であり灰白色を呈し、焼成は良好で全体に自然釉がかかった状態である。正面にむかって右側にのみ、刀子もしくは篋で非常に細かく獣毛を表現してお



(縮尺 1/2)

り、顔の表情や体つきが丁寧形成されている。

この遺物は弥生時代後期の竪穴住居（S B50）の覆土から出土したが、周囲の状況から、近接する平安時代の土坑（S K31）に伴う遺物であった可能性が非常に高い。

この遺物の全体の形状や用途などについては今後の課題として検討していきたい。

(蟹江吉弘)

セ ン タ ー 日 誌

埋蔵文化財専門研修会

愛知県埋蔵文化財調査センター

11月28日(木)・29日(金) 参加者 61名

現地説明会

11月16日(土)

山中遺跡(一宮市) 参加者 200名
弥生時代後期末の前方後方形周溝墓。

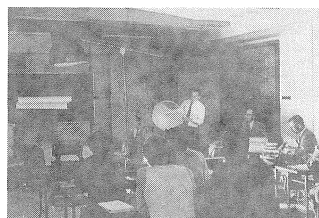
12月14日(土)

名古屋城三の丸遺跡(名古屋市) 参加者 400名

江戸時代の家老屋敷と戦国時代の那古野城。

来訪者

10/15 県立常滑高校PTA 50名
海部教育事務所 15名
津島保健所 12名
18 三重県フィールド検討会 15名
公立埋文研修会 55名
21 東栄町社会教育委員 13名
24 長野県埋蔵文化財センター 町田勝則氏
28 美和町長他



11/7 岡山市古代吉備文化財センター 2名
22 県立津島高校PTA 30名
25 元興寺文化財研究所 2名
26 元興寺文化財研究所 3名
12/6 西春日井郡教頭会 32名

埋蔵文化財愛知 No.27

発行日 平成4年1月1日
(財)愛知県埋蔵文化財センター
編集 〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須
発行 新田字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス